

（新ポリティカにつぼん） 故三宅正一さんと角栄の「戦後」

早野透＝桜美林大教授・元朝日新聞コラムニスト 2014年5月20日 15時39分



衆院本会議で代表質問する三宅正一衆院議員＝
1968年8月5日



「ロッキード事件」後の政治刷新を争点にした1976年の第34回総選挙で演説する田中角栄氏。田中氏は「ロッキード事件」にからんで受託収賄罪などで起訴されたが、無所属で新潟3区から立候補した＝76年11月16日、新潟県刈羽郡西山町（現・柏崎市）

安倍首相がいよいよ集団的自衛権を世間に認めさせるべく動き出した。

「戦後」という時代、もう戦争はこりごりだという民衆の気持ちに沿って、そりゃそうだ、自衛の範囲ならともかく、海外にまで戦争にでかけるのはよそうねと、自民党政権も思っていたのを覆そうというのだから、なかなかおおごとである。

国境のトンネルを抜けると、田んぼに水が張られ、青空が映っている。田植えの季節である。18日の日曜日、新潟県長岡市の寺で、かつての社会党代議士、農民運動の指導者として有名だった三宅正一さん（1900～1982）の33回忌があるので、私もでかけた。

「いやあ、なんだかきなくさい時代になりましたなあ」「安倍さんは何を考えているんでしょうねえ」

ここは、旧新潟3区。田中角栄が席卷した選挙区である。その角栄と同時期、三宅さんの貧乏選挙を支えた青年たちもいまはすっかり白髪、はげ頭である。

悠久山という小高い丘の上の三宅さんの胸像にお参りした。30歳ではげたという



早野透(はやの・とおる) 1945年生まれ、神奈川県出身。68年に朝日新聞に入社し、74年に政治部。編集委員、コラムニストを務め、自民党政権を中心に歴代政権を取材。2010年3月に退社し、同年4月から桜美林大学教授。著書に「田中角栄 戦後日本の悲しき自画像」など＝安富良弘撮影



それに比べて、どうもこのごろの政治の様相は精緻(せいち)というべきか、針でつくように細かいというべきか。

いわゆる「安保法制懇」の報告書を受けて、安倍さんはいつどこからどんな形で外敵が攻めてきても「切れ目のない」対応をすると打ち出した。攻撃か示威かよくわからないグ

三宅さんの闊達(かっかつ)な面影がほうふつとする。

「冬の間、胸像が傷まないように竹囲いして守っているんです。雪が消えたら囲いを解くんです」

毎年そうしているというのだから、三宅さんの信望がいかに厚かったか、よくわかる。私も三宅さんが衆院副議長時代に知り合って「きみね、ブラジルの芋から代替ガソリンがとれるんだよ。それをすれば、石油危機なんて解消だよ」などと気宇壮大な話を30分も聞かされ、閉口しながらも愛着を覚えた思い出がある。

■安倍首相を信じて改憲を任せるか

お寺の読経を聞きながら、あのころの政治家は、みんな夢があったなあ、三宅さんは小作争議を指導しながら地主の娘さんと恋に落ちたり、角栄さんもまた「上越国境の山を崩して雪を降らなくする」とか日本列島改造論とかぶちあげたりしてたなあなどと思いだしていた。

レーゾーンをどうするかとか、時には海外に出て戦わなくちゃならないんだとか、集団的安全保障にどんな形で参加するかとか、いろいろ論点があるのだが、報告書を読んでも首相の会見を聞いても、話が細かすぎて万人がわかるというわけにはいかない。よくわからないけれども安倍さんを信じて任せるかとなると、どうも最近の世論調査はそうでもない。

読売新聞の2月調査では、憲法改正に賛成する人が9ポイント下がって42%になり、改正反対の41%と並んだ。産経新聞の3月末の調査では、憲法改正の賛成派が1年前より22ポイントも減って38%となり、反対派が20ポイント上がって47%になって逆転した。安倍さんの改憲論に賛同する両社の調査結果をどう解すべきか。

安倍さんの言うことはよくわからないけれども、憲法9条をいじるのはなんだか不安だ、安倍さんが意気軒高にぶちあげるとかえって身をひきたくなくなるというのが人々の気分なのではないか。どうもそこに危険が潜んでいるようだということを直感的に感ずるのではないか。

■「平和と繁栄」求めた時代の残像

お寺では法事に続いておときがあって、かつての同志60人が飲んで語り合った。三宅さんは最後の意識不明のときにも、社会党と民社党が分裂したのを悔やむうわごとを言っていたとか、社会党の力がなくなったのがまことに残念とか、いろんな話がでた。かつて「護憲平和」の社会党が健在で、自民党政権への大きな歯止めになっていた。であればこそ、角栄も「押しつけという話もあるが、憲法は日本国民の英知によってすべて消化され定着した」と発言していた。いまは、野党もばらばらで与党への影響力はかつてのようではない。

三宅さんには、ロッキード事件に苦しむ角栄の街頭演説に際会して、車から降りて「体に気をつけろよ」と励ましたという挿話がある。このとき角栄は「農民の恩人である三宅さんを落としたり新潟県人の恥である」と演説を続けた。私は、むかし新潟3区の角栄支持者を取材して、「角栄さんがいなければ、三宅さんに票をいれる」という声にたくさん出会って驚いたことがある。

「戦後」とは、戦争はいやだ、もうかんべんしてほしい、少しでも豊かになりたいという時代だった。自民党と社会党がつくった55年体制は、具合の悪いところもいろいろあ

ったけれども、「平和と繁栄」を求めるという点では共通していた。いま、世論調査で意外にも憲法改正反対派が増えたのも、この時代の残像が国民意識のなかにあるからではないか。

どうも安倍さんは、「戦後政治」のいいところを一挙にぶちこわそうとしているんだなという思いを肌を感じつつ、上越新幹線で東京に戻った。

(早野透＝桜美林大教授・元朝日新聞コラムニスト)

この記事に関するニュース

- (新ポリティカにつぼん) 故大平首相誕生日に集った6人(5/5)
- (新ポリティカにつぼん) 漱石、大江氏、そして山本有三(4/22)
- (新ポリティカにつぼん) 「国家の体面」ばかりではなく(3/4)
- (新ポリティカにつぼん) 角栄は遠く…自民の器量いずこ(12/17)
- (新ポリティカにつぼん) 「秘密国家」に挑む記者魂(11/19)



三宅正一胸像

故・三宅正一さん、明治三十三年岐阜県に生まれた。早稲田大学政治経済学部に学び、大正デモクラシーの風雲に乗じて学生時代、早くも社会運動に身を投じ、のち日本農民組合日本労農党を源流とする革新の大儀に生きる。大正十三年新潟県に入り農民運動にしたがい、大小幾多の小作争乱を指導する。

昭和十一年新潟三区より参議院議員に当選し、いらい議員在職三十八年、五十一年衆議院副議長となる。五十七年五月二十三日逝去、享年八十一。